

くらし・家庭

少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ①



〈図2〉1979年刊の単行本『リボンの騎士』 ©手塚プロダクション

世界149カ国中「110位」。昨年12月18日に世界経済フォーラムが発表した「Gender Gap Report(男女格差報告)」における日本の順位である。一昨年の114位からわずかに順位を上げたとはいえ、この残念な結果を私たちは真摯に受け止めるべきだ。男女共同参画社会の実現に向け、何ができるのか真剣に考える必要がある。

長過程において、身近にあるメディアの一つである。だからこそ、その中でジェンダーはどのように描かれているのか、そこにゆがみや負の影響はないのか、われわれおとなが冷静に精読する必要があると考えるからである。

男の心、女の心

『リボンの騎士』という長編マンガがある。手塚治虫によって1953年から『少女クラブ』(講談社)に連載された『日

本初ストーリー少女マンガ』である。主人公であるサファイアは、天使チンクのいたずらによって〈男の心〉と〈女の心〉を併せ持つて生まれてきた、というファンタジックな設定である。このほかに、悪魔や人魚、魔法といった要素がふんだんに盛り込まれており、それまでの少女向けのマンガとはまったく違う世界観で描かれた作品であった。

その一つとして、この連載ではマンガの中で描かれ、表現されているジェンダーについて考えていきたい。

サファイアは時に〈王子〉として悪魔や悪巧みをする大公たちと戦い、時に〈姫〉として隣国の王子と許されぬ恋をする。今よりも抑

『リボンの騎士』

マンガは子ども成

先鋭的だった〈男装の麗人〉

塚治虫漫画



性的な生活を強いられ、さうにサファイアが長きにわたる戦いに勝ったシーンでは、雑誌連載時にはなかった「国のおきてがあらたまって、女でも王座につけることになったのです」という説明が加筆されている。(図2) 53年より始まった『リボンの騎士』は、決して女性の社会的地位が高かった時代に描かれたものではない。手塚が時代の変化に鋭い感性をもって

いたことは、〈男装の麗人〉という先鋭的な設定や、その後の度重なる改稿・修正に窺い知ることができ

手塚の作品を手始めに、代表的な作品を紹介しながら少女マンガとジェンダーについて考えていきたい。

(日本出版学会理事・大学講師) (金曜掲載)

〈図1〉雑誌連載時の少女クラブ版『リボンの騎士』 ©手塚プロダクション



「これこれ、そこてけんかしてる子おまえは男の子にするぜ」
「じかんがないよ、一れつに」
「男の子にはたくましさや、女の子にはやさしさとしとやかさをのませるのが、あしのやくめじゃさあ、生まれるこどもたちよ、ここへおならび」